



# シモマチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 盛岡中央高校附属中学校副校長

## 最終回

# 昨年末に思ったこと

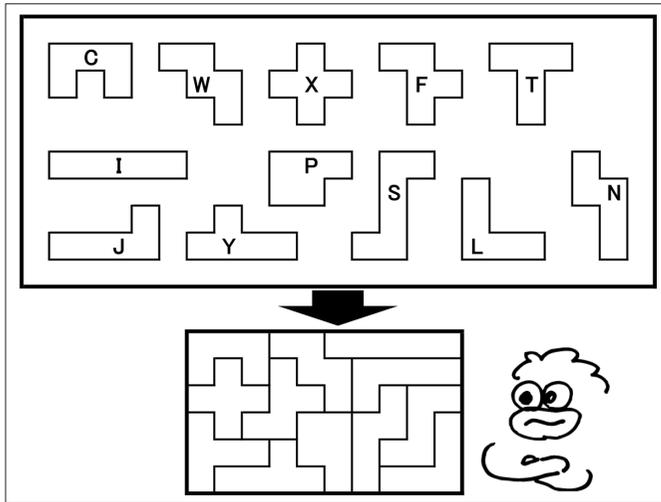
### □「エール」の総集編

昨年末のある日、NHKの朝ドラ「エール」の総集編をやっていたので何となく見ていたらすっかりハマってしまいました。私は朝ドラを見ることがないので、エールとはどんなドラマなのかわからない状態だったのですが、総集編だけで涙があふれるほど感動したのでした。「半年かけて朝ドラを見続けるより総集編だけでいいじゃん」などと感じつつも、同時に、膨大な日々の番組からチョイスしてこの感動的な総集編を作り上げたプロデューサーの敏腕ぶりに唸ってしまったのでした。そして、これは授業づくりに通じるものがあるのではないかと思ったのでした。

教科書が学問という壮大な領域を一冊の書にまとめたものだとなれば、教師はそれに命を吹き込むがごとく、題材を選び、知識を編み直し、教材として生徒に提示する人と言えます。その教師自身が知の探究者であればあるほど、授業という場の中で、生徒は学問の面白さに目覚め、探究心に火

がつきます。それはまさに感動的な「総集編」を作り上げるプロデューサーそのものです。実際私は「総集編」を見た後、登場人物の古山裕一の人物像に関心を持ち、ネットで調べました。初めて見た多くの人は私と同じようなことをするのではないかと思います。戦時中のカルチャーやスポーツと音楽の親和性などに考えを巡らせる人もいます。あるいは総集編に刺激される本編を一から見直す人がいるかもしれません。まさに、総集編という「授業」がきっかけとなって、それぞれの学びが駆動されたということですね。

昔、東京FMで放映されていた「AVANT I」という番組で、映画プロデューサーの話の小耳にはさんだことがあります。それは、理想の映画プロデューサーとは「お客さんとその映画を見る動機をつくってあげる人」「まだその中身を知らない人に見ようと思わせるきっかけを与える人」という話でした。私はこのときも膝を打ち、授業論に及んだのでした。つまり、学びとは、教師によって注入されるものではな



く、本来自分の中に既にあるものということ。それに気づかせるのが理想の教師であり授業の役割なのだと思います。

### □ ペントミノパズル

年末に書類を片付けていたら、学生時代にハマっていたペントミノパズルが出てきました。ペントミノパズルとは、図のような12種類の異なるピースを6×10の長方形の

枠に隙間なく敷き詰めるというものです。

私は、このパズルを懐かしく手にしながら、頭の中に今度は「ペントミノパズル授業論」が浮かんだのでした。

異なるピースは、それぞれが異なる個性を持つ生徒のメタファ。これを敷き詰めるということは、それぞれが個性を発揮しながらも、互いに良い関係をつくり、全体として一つに調和していくということです。

例えば、X型ペントミノはその形状ゆえコーナーに配置することができません。ある意味使いづらいピースです。一方、P型ペントミノは非常に使い勝手のいいピースです。もし、すべてのピースがP型だったら、誰でも容易に敷き詰めることが可能ですね。でもそれは、授業論で言うと、生徒から個性を奪い、教師の都合による効率的・均一的な集団をつくることと言えます。つまり「枠にはめ込めさえすればいい」＝「結果さえ出ればいい」という成果のみを目的とする倒錯的な考え方です。

確かにX型ペントミノは使いづらいかもしれませんが、でもC型との相性が良いので

す。また、F型と合わせれば応用が広がります。このように組み合わせの塩梅を考慮しながら、それらを調和させ一つの形にまとめあげること。これこそが教師の仕事の醍醐味であって、たとえうまくいかなくてもその失敗のプロセスから多くのことを学び、生徒とともに成長していける存在になっていくのではないのでしょうか。

さて、私の連載も今回で最後。長きにわたっておつきあいくださり本当にありがとうございます。ありがとうございました。

私たちはコロナ禍という混乱の中におります。最後に、ヘレンケラーの言葉で締めくくりたいと思います。

私はたった一人の人間でしかありません。しかしそれでも一人の人間です。私は万能ではありません。しかしできることはあります。そして、万能でないからこそ、私はできることを拒みません。世界は苦しみに溢れています。しかし、それに打ち勝つことでも溢れています。